宮川健郎　私の出会った児童文学者たち　第５回
第２章　前川康男先生と今西祐行先生
その２　長編物語の創造

童話雑誌『びわの実学校』の校長は、雑誌を主宰されていた坪田譲治先生だが、副校長は、創刊号からの編集長の前川康男先生（1921～2002 年）だろう。母宮川ひろがはじめて投稿した短編「たからもの」が第 16 号（1966 年 5 月）に掲載されたあと、作品を見てくださるようになった今西祐行先生（1923～2004 年）は、母の担任ということになる。私は、子どものころから、今西先生に、そして、前川先生にもお目にかかる機会があった。

『童苑』学徒出陣号

1943（昭和 18）年の秋から冬にかけて、前川康男先生や早大童話会のメンバーは、あわただしい日々を送っていた。1960（昭和 35）年に刊行された『早大童話会 35 年のあゆみ』の巻末に付された「早大童話会年表」のこの年のところには、つぎの記事がある。

学徒出陣令布かれ、会員の入隊しきり。
十一月　鈴木隆、十二月　前川康男、永井蒴二、十一月三〇日送別会（本郷前川宅）十二月一日童話会全員で「桃太郎」をうたい前川入隊
「童苑」学徒出陣号発行（カッコ内原文）

『早大童話会 35 年のあゆみ』は、100 ページほどの冊子で、少部数つくられたものと思われる。編集は、岡本良雄、前川康男、寺村輝夫。かつての会員たちが思い出を寄せているのにまじって、前川先生も、「二冊の童話集」と題して書いている。

新聞紙上で、法文系学生の徴兵猶予停止が報じられたのは、1943 年 9 月 23 日だった。これによって、いわゆる「学徒出陣」、大学や専門学校に籍を置いたままの出征が実現する。10 月 21 日には、雨のなか、明治神宮外苑競技場で出陣学徒の壮行会が催された。

徴兵猶予停止が発表されて、出征が決まった早大童話会の会員は、前川先生、今西祐行先生ら６人だった。そして、にわかに、童話会の機関誌第４号、『童苑』学徒出陣号が準備された。1944 年（昭和 19）1 月 1 日付で発行された雑誌の巻頭には、罫でかこまれて、６人の名前が「出陣先輩」として列記されている。そして、「あとがき」には、当時、高等師範部の学生だった向坂隆一郎が「九月下旬に出陣号令下つて十二月一日には、もう先輩を送り出すと云ふ急転回のうちにあつて編輯に成る」と書きつけている。

学徒出陣号は、Ｂ６判、全 236 ページ。掲載されている前川先生の「夜汽車の話」は、「遺書のつもりで書いた」童話で、11 月 30 日の送別会のとき、酔っぱらった仲間たちの前で朗読されたものだ(「二冊の童話集」前掲)。今西祐行先生の作品は、

「天窓に光る星」というタイトルだ。

「夜汽車の話」

８ページほどの短い童話である。つぎが、その書き出し。

僕をのせた汽車がゴトリと、どこか知らないえきにつくと、六十ぐらゐのおぢいさんとふとんにくるんだ赤ちやんをせをつたお母さんとがのりこんで来ました。そとは雪です、まるい月がしづかにひかつて、あたりはうす青くかがやいてゐます。

作中の「僕」は、夜汽車にのって入営するところだ。この汽車は、現実的なそれではなく、心象のなかの汽車として描かれている。

もうすぐ僕はこの服を脱いで、銃をとつて軍人になるのだ、この汽車がはやく走れば走るだけはやく軍人になれるのだ、ゴソゴソした軍服をきて、うんとふんばつたすがたを雪のうへにさうざうするとくすくすひとりでにわらひがこみあげて来ました。

作品は、「赤ちゃん」と「英霊」の二つの章にわかれている。冒頭に出てくる赤ん坊の父親は、戦死したという。汽車には、白木の箱をかかえた人がのりこんできたりもする。これから靖国神社に行くという赤ん坊のおじいさんは、「この子のおとつあんはこの世をよくするためになくなつたんぢや、だからわしはこの子もやつぱりおとつあんのやうに、この世をよくするやうな男にしたてるようとな」といって、静かに目をつぶる。「僕」は、「みんなが良い世界をつくらうとおもつてゐれば、きつとなかの良いたのしい世界になるだらう」と考える。

作品は、「汽車は吹雪のふきすさぶなかを、たのしい世界をつくらうとする人たちをのせて矢のように驀進してゐました。」としめくくられるのだが、気がかりなのは、「ちきしよう！」とつぶやくようにいう乗客の存在だ。彼は、白木の箱の「英霊」が車室に入ってきたのを見て「ちきしよう！」といい、赤ん坊の父親の話を聞いて、また「ちきしよう！」という。何をのろっているのかは、わからない。それでも、この「ちきしよう！」は、作品にある違和感をもち込んでいる。

思い出すのは、学徒出陣を経験した歴史学者、色川大吉の「汚辱の“学徒出陣”」（東大十八史会編『学徒出陣の記録　あるグループの戦争体験』中公新書 1968 年所収）という文章だ。

いまからふりかえってみると、“学徒出陣”についての私たちの実感には、ふたつの異質なイメージがまじりあっていたように思われる。

ひとつは小さな自分の生命の枠を越えて、民族＝共同体的なもののなかに献身してゆこうという自己犠牲的な気持。“日本浪漫派的な美意識”とでもいってよいひとつの陶酔感がそこに流れていて、国家も世論もおおやけの美徳として

それを讃え、それに帰一することを要求していた。

もうひとつは、まさにその小さな私の命に執着し、さいごに残されたわずかな自分の人生を、いかに最大限にさいごの瞬間まで生きつくすかという、ひそかな、しかし、強いパトスであった。（傍点原文）

色川は「戦争中はこの二つのものが混沌と交りあい、重なりあい、一種の悲痛な感じをかもしだし、私たちをとらえていた。」というのだが、「夜汽車の話」に表れているのは、まさに、この「悲痛な感じ」ではないか。

未明を焼く

『早大童話会 35 年のあゆみ』の前川先生のエッセイの題になっている「二冊の童話集」の１冊は、「夜汽車の話」が掲載された『童苑』学徒出陣号のことだ。もう１冊は、小川未明の童話集『赤い蝋燭と人魚』（冨山房百科文庫 1938 年）だ。戦地に１冊だけもって行ったという。エッセイには、「ポケツト版だつたし、こまかい活字で代表作がたくさん入つていた」「外国の青年たちがバイブルや、ゲーテの本を持つて戦場に行つたと同じ気持だった。」と記されている。前回のおしまいに引用した前川先生の自筆年譜（インタビューア・神宮輝夫『現代児童文学作家対談４　今西祐行・大石真・前川康男』偕成社 1988 年所収）によれば、敗戦の日に、その『赤い蝋燭と人魚』を焼いてしまったというのである。それは、どうしてか。エッセイ「二冊の童話集」には、こう書かれている。

私は思いきつて、その童話集も焼いてしまうことにした。ジヤケツトもカバーも、扉も目次も、一枚一枚切りさいて火の中へ投げた。所々に入れられた挿画が、一篇一篇のなつかしさを思い出させてくれる。こまかく一頁ずつ焼いたのも、本の形を完全に消してしまいたかつたからだ。

あの入隊前夜の十一月三十日に、みんなで飲んだ時、これで童話ともお別れだと思つたが、この時は私の命も人生もこれで終りだと思つた。

つづけて、「それから約一年、日本へ帰るまで幽霊みたいな生活を送つた。」とあるから、敗戦をむかえた心の空白が、童話集を焼かせたのだろうか。

ここで、どうしても連想してしまうのが、1959（昭和 34）年に発表された古田足日の評論「さよなら未明―日本近代童話の本質―」（『現代児童文学論』くろしお出版所収）である。古田は、近代のことばが「対象を指示し限定し、あらゆる存在のなかからそれを区別し、取り出そうとする。」のに対し、「未明は分化したことばを使って、その指示・限定とは逆に、ことばの意味をふくらませ、指示物に感情を吹きこんだ。」と述べた。小川未明の詩的、象徴的な性格が指摘されている。

戦後、前川康男の文学は、未明とはちがう叙事的な方法を獲得し、それが、やがて、『ヤン』（実業之日本社 1967 年）や『魔神の海』（講談社 1969 年）といった長編を出現させる。『魔神の海』は、アイヌと江戸時代の日本とのあらそいを描いて、国家というものの構造、戦争はなぜ起こるのかといった問題にせまった。前川先生

のその後の歩みに照らして考えるならば、敗戦の日、『赤い蝋燭と人魚』を火にくべたとき、先生は、小川未明、あるいは、未明に代表される「童話」との別れを予感していたのではないか。このとき、すでに、『ヤン』が構想されていたなら（自筆年譜）、なおさらである。

古田の「さよなら未明」から遡行して、あるいは、『ヤン』や『魔神の海』から「逆算」して、敗戦の日の前川先生を意味づけるのは、つつしまなければならないだろう。それでも、戦争を経験した人間が何かを表現しようとするとき、古田足日が指摘したような未明の限界は意識されたのではないか。

『びわの実学校』の目標

『日本児童文学大事典』全３巻（大阪国際児童文学館編、大日本図書 1993 年）の逐次刊行物の項目の一つ「びわの実学校」は、前川先生の執筆だ。Ｂ５判４段組みの事典だが、1 ページ半の分量の大きな項目である。あつかわれているのは、坪田譲治先生が発行した創刊号から、坪田先生が亡くなった４年後の第 134 号までのことだ。前回と前々回、第 134 号を「終刊号」としたが、正確には「第一期完結号」で、その後、後継誌である『季刊・びわの実学校』全 30 号（1986 年 10 月～94 年 1 月）、『びわの実ノート』全 33 号（1997 年 3 月～2007 年 11 月）が刊行される。『日本児童文学大事典』刊行の時期と、前川先生がこの項目の原稿を執筆したであろう時期もあって、後継誌については、『季刊・びわの実学校』の創刊のことが一言記されているだけだ。だから、下記は、まずは第一期についてのことと考えられる。

> 主宰・譲治の念願は、往年の童話雑誌「赤い鳥」のような雑誌を作って、新人作家を発掘、作品発表の舞台を提供、広く世に紹介したいということであった。（中略）新人を発掘育成をすることとともに、子どもの文学のリアリティの追求、長編物語の創造、この三点が雑誌の目標であった。

「雑誌の目標」の三点のうち、「新人を発掘育成すること」については第 1 章「坪田譲治先生」にも書いたけれど、注目したいのは、三つめの「長編物語の創造」である。（注１）また、前川先生の自筆年譜の記述を思い出す。1946（昭和 21）年６月末、上海での 10 か月の抑留生活をへて、先生は、両親のいた札幌に復員する。1949（昭和 24）年 12 月に上京するまで、素人人形劇団をつくって巡回公演をしたり、札幌の出版社ではたらいたりした。年譜の 1947（昭和 22）年（26 歳）には、こう書かれている。巡回公演中のことだ。

> 根室で国後島を眺め、なぜ人間は、憎しみ合い、殺し合うのかと、激しい憤りをおぼえる。長編「魔神の海」を書きたいと思った。

『魔神の海』は、はじめから長編として構想されたようだ。前川先生だけではなく、敗戦後の子どもの文学は、長編を求めていた。坪田先生が『びわの実学校』の

創刊について相談したという（第２回参照）関英雄（1912～1996 年）ら既成作家が雑誌『長編少年文学』準備号を出したのは、1958（昭和 28）年４月だった。関の「長篇創作の諸問題」、猪野省三の「積極的な人間像を」といった評論が掲載されている。関は、創刊号（1958 年 6 月）にも「現代への照明――続・長篇創作の諸問題」を書いて、「われわれ現代日本の児童文学者の立つ現実と、長編制作に臨むわれわれに課された問題は何か。」と問いかけた。

『北国の犬』（有光社 1942 年）でデビューした作家で、評論家でもあった関英雄は、これより前、「劇としての童話を」（『新日本文学』1950 年 1 月）という評論を発表している。

> わが国創作童話の伝統という場合、私は「詩としての童話」をさす。これまでのわが国の童話文学はおおむね短篇の散文詩であり、そういう種類の作品に佳作が多かつた。小川未明、宮澤賢治、坪田譲治などのすぐれた作品はみなそうだ。それは劇であるよりも音楽であつた。

関は、「詩としての童話」ではなくて、子どもの関心にこたえる「「劇としての童話」「散文としての童話」が、今日、児童文学者が手がけなければならない新な沃野として、大きく問題にされるところまで来ている。」と述べた。これは、この時期の子どもの文学がめざすべき方向を明確に示していた。そして、「劇としての童話」を実現する器として、短編ではなく長編が求められたのだ。前川先生の模索も、ここに重なってくる。

「オリオン星座」

前川先生は、神宮輝夫をインタビューアとする『現代児童文学作家対談４　今西祐行・大石真・前川康男』（前掲）で、こう話している。

> 『ヤン』も児童文学者協会の新人会の「児童文学研究」に「オリオン星座」という題で短編で書きまして、それが次に中編になって最後に長い作品になったという経過をたどっています。

「オリオン星座」は、『児童文学研究』第９号（1952 年 11 月）に掲載された。（注２）夜の街角で、靴みがきの青年が、ビルの左のところに見える四つ星を見上げている。青年は、「あれはオリオン星座つていうんだ。あの星の話をしてあげようか。」といって、花売りの少年少女たちに語りはじめる。それは、「兵隊で支那へいつていた時のこと」だ。――「戦争の終る年に、おじさんは、揚子江という河のほとりにいつていた。……」単行本『ヤン』の第１部「揚子江の星」と重なる内容である。ヤンにあたる少年は、リュウという名前で登場する。アメリカの夜間爆撃が急に正確になってきた話、地上から灯りで合図を送っているらしいだれかを捜索する話も出てくる。河の両岸から二つずつの灯りで爆撃目標を知らせるのが、オリオン星座と呼ばれている。

対談で、前川先生が「それが次に中編になって」といっているのが『びわの実学校』連載の「ヤン」だろう。前回、連載「ヤン」を、いわば、おまんじゅうの餡にあたる部分とした。この餡をどのような生地（皮）につつんで読者にわたすのかを考えるとき、もっとも重要だったのが、物語全体の語り手である「私」、前川先生自身を思わせる平野見習士官にどのように語らせるかということだったはずだ。これは、『ヤン』という物語を語る責任にかかわってくる。単行本『ヤン』の「私」は、「オリオン星座」の靴みがきの青年が成長したすがたともいえそうだ。

長編の児童文学が模索されていた時期に、「日本にはかつて、一篇の『ハックルベリィ・フィンの冒険』も『十五少年漂流記』も『クオレ』も『飛ぶ教室』も創作されなかった」（佐藤忠男「少年の理想主義について―『少年倶楽部』の再評価―」『思想の科学』1959 年 3 月）というような言いかたで、あるべき物語のモデルを求めたことがあった。（注３）最終的に単行本『ヤン』という長編になった物語のモデルは、まさに、『ハックルベリィ・フィンの冒険』ではないか。苦力（クーリー）頭の叔父の家を飛び出して旅をするヤンには、ダグラス未亡人の保護をのがれて、逃亡奴隷のジムとともにミシシッピをいかだで下るハックがダブってくる。『ヤン』もまた、揚子江という河の物語だったのである。（つづく）

（注）

１、『びわの実学校』は、前川先生の「ヤン」のほかにも、今西祐行「肥後の石工」（第２～７号）、大石真「教室 205 号」（第 13～30 号）など、いくつもの長編物語を生み出している。

２、自筆年譜には、1952（昭和 27）年５月に発表と記されているが、これは、誤記だと思われる。

３、神宮輝夫は、「私たちは、いつも、日本の児童文学にはなぜ一本足のジョン・シルバーやトム・ソーヤーやキムが生まれないかというなげきをもってきた。」といい（「現代の児童文学におけるリアリズム」『日本児童文学』1968 年 4 月）、鳥越信は、「マーク・トウェーンやケストナーがなぜ日本の児童文学に生まれなかったかという嘆きが、昭和三十四年の児童文学革新を生んだ。」（「児童文学史の方法　大衆的児童文学を中心に」『國文学　解釈と教材の研究』1971 年 11 月）と述べた。

（付記） 宮川健郎『現代児童文学の語るもの』（NHK ブックス 1996 年）の第一章「『童苑』学徒出陣号をめぐって――現代児童文学の遠いみなもと」ほかの章と重複する部分があることをおことわりします。